

災害救援本部通信

No.17

発行日：2014年4月11日
発行所：真宗大谷派宗務所
(組織部)
発行人：災害救援本部長
藤戸秀庸

— 除染に対して様々な思いをお持ちだと思えますが、その除染に臨むにあたっての思いを教えてください。

吉田 最初は、とにかく手探りで除染を始めましたが、「除染」という言葉も初めてだったので、何もわかりませんでした。しかし、除染しなければならぬ。ただ結果がどうなるかが不安でした。

— 今まで経験したことのない除染を行っていく上で、様々な苦勞があったことと思います。

中川西 まず除染にあたり実証実験を行いました。事前に線量を計り、1cmずつ表土を削ることにより線量がどうなるかと、試行錯誤しながらなんとか線量を下げようと努力しました。郡山市の場合は、実証実験の中で発見したオレンジオイルでU字溝や石などを洗浄します。他の市町村の建設業者は、あまりオレンジオイルを使っていません。私たちはどのようにすれば線量が下がるかと、いつも実験しながら除染しています。

— 除染は様々な現場・状況があると思えますが、環境省の基準どおりに除染して線量は下がりますか。

中川西 環境省が示す除染方法どおりに作業を行った場合、例えば学校にあるウッドデッキは線量が下がりませんでした。木はなかなか線量が下がりません。それで環境省の方に来てもらい、話し合った結果、交換または解体してオレンジオイルで洗浄しました。私たちはお金が目的ではなく、線量を下げることが目的です。環境省の指示どおりに除染を行うだけでなく、線量を

『真宗』誌、『同朋新聞』で既報の宗派における仙台教区寺院の除染事業支援については、支援の申し出のあった五カ寺の除染作業が完了しました。

今回、この除染を担当いただいた業者の吉田修さんと郡山区建設業協同組合の中川西好治さんのお二人にお話を聞きました。



Interview
(左：吉田氏、右：中川西氏)

除染への思いと、 周辺への影響

如何に下げるといことを考えています。

— 実際に除染を行う中で、お寺の除染の必要性を感じられたことはありますか。

吉田 幼稚園や保育園と一緒に、お寺は不特定多数の人が集まる場所ですので、一般住宅より先に除染を行うことが必要なのかなと感じました。また、一般個人住宅は、建築基準法で雨樋を必ず取り付けなくては いけません。古い建物である神社仏閣は雨樋がない場合が多いです。放射能が飛来

今回行われた除染の様子



表土を削る



汚染土を埋める



オレンジオイルによる洗浄

下がらないこともあります。そして、線量が毎時〇・二六マイクロシーベルトの場所は、やはり低減率五十%にするということは大変困難ですので、そういうところは低減率が低くなります。

— 除染を行った一カ寺の集落では、汚染土の一時保管場所が無いということで集落全体が除染を断りましたが、その中でお寺が除染をして、周辺の方の反応などを聞かれましたか。

吉田 お寺の除染を近所の方々が目に来られて、「お寺は埋める敷地があるから除染ができていいね」と話されていました。汚染土などは、その敷地内や近所に埋めたとしても、これが最終処分ではなく、これから設置予定の中間貯蔵施設に移すまでの仮の仮置き場です。東京電力の原発事故により生じたゴミなのでしようが、地域住民が協力して仮の仮置き場とする場所を提供するという話に至らなかったようです。

確かに誰もが自分の敷地に汚染土を埋めるのは嫌だと思えます。そして、汚染土を移せないかもしれないという不安があり、結局、先に進めないという状況があったようです。地域住民と行政が真剣に協力しなければ、除染は進まないと思います。

— そういう意味では、今回のお寺の除染がきっかけとなり、周辺の方々がやはり除染をすべきだという意見になるのでしょうか。

吉田 南相馬市の原町別院でも、ほぼ毎日この区長さんがいらつしゃいます。昨日も「お寺さんは単独だから、除染ができるのかな」という話をされていました。「町の議員さんは、線量が高いことをわかっていながらも、除染事業が進まない」ともお話していました。

中川西 郡山市の場合は住宅除染を行う際に、住民の方から同意書をいただきます。その家を除染すると、除染に同意しなかつた方が、あんなに綺麗になるのであれば除染をしてもらおうと、後から同意書を提出されたこともあります。多分、これもこのように綺麗になり、線量が下がったとなれば、行政や住民も動き出すかもしれません。

— そのように周辺にも影響を及ぼす支援事業になればと思います。

中川西 先程、話のあった除染を断っていた集落でも、今、除染をしようかという話が出ています。

吉田 当然、私たち業者が動けば、経費が掛かります。結局は行政の仕事だと思えます。地域住民を思うのであれば、除染の経費は東京電力や国からいただけるように働きかけ、スムーズに除染ができるように努力していただきたいと思います。

— ありがとうございます。

仙台教区浜組 同朋総会報告

旧警戒区域内の3カ寺と組の教化事業について

去る2月17日、浜組同朋総会が開催されたので、報告します。



浜組とは

浜組は、福島県の海岸線沿いの市町村、相馬市、双葉郡、いわき市に所在する寺院で構成されており、福島第一原子力発電所の事故による「居住制限区域(※①)」内の1カ寺、「帰還困難区域(※②)」内の2カ寺が所属する組でもある。

また浜組は、組内地域の中間に福島第一原子力発電所が存在するため、現在、原発事故により道路の不通箇所があり、北部と南部に分断されている状態である。

同朋総会

震災後、旧警戒区域の方々の仮設住宅住まい、県内・県外避難などの様々な状況により、浜組では震災前に行っていた教化事業も休止せざるを得ない状態となり、今回の同朋総会も震災後初の開催であった。

同朋総会当日は、折しも前週の記録的な大雪により除雪作業が追いつかず、高速道路の通行止めなどの交通事情によって、参加できなかった方が多数おり、当初参加予定の半数程の人数となった。

今回の同朋総会の内容は、今後の居住制限・帰還困難区域内の3カ寺の活動と、それに対する宗派・教区・組の協力について、そして組の教化事業についてであった。

門徒の分散と仮設住まい

現在、居住制限・帰還困難区域内の3カ寺の門徒は、県外に避難され、また県内の双葉郡周辺の市町村に分散しており、そのほとんどの方が仮設住宅に入居している。

その3カ寺が共有して法務などを行うための施設を設けるという提案もあったが、分散した門徒からは、現在、自分が暮らしている近隣で寺院活動をし

ていただきたいとの要望があり、また仮設住宅はあくまで仮の住宅であるため、これから門徒がどこに移り住まれるかが全くわからない状態という事情もある。

そのため、これから門徒の帰宅・移住などの動向次第では、施設を設けても何年後かには、その施設自体が活動の足かせになる可能性がある他、維持管理の課題もあり、現時点で施設は不要ということで意見がまとまった。

離散門徒との関係と対応

3カ寺の門徒の中には、現在、在住する地域の寺院に所属移転した方もあり、場合によっては、連絡なく転居している方もあるようで、その中には他宗の寺院に移られている可能性もあるとのこと。

このような状況で宗旨替えを防ぐためにも、真宗大谷派というネットワークを利用して、移住先の大谷派寺院の紹介や、東京の真宗会館の仏事代行制度を活用してはどうかという意見もあったが、そのような制度があることを知らない門徒がほとんどであるため、それを転居された門徒にお知らせする必要があるという意見があった。

しかし、門徒が他の寺院に移転していくことは、今後の寺院活動・運営に影響するため、宗派内の寺院に問い合わせがあった際には、これまでの寺院との関係性を継続するようお願いいただくなどのルールづくりが必要であるという意見もあった。

宗派・教区・組の協力

このような現状の中で、3カ寺に対する宗派・教区・組の協力としては、昨年、本山報恩講期間中「報恩講のつどい」を実施し、全国に分散した門徒が集い、住職と門徒、そして門徒同士が繋がり、真宗大谷派の寺院の門徒であることを確認しあえる場を設けることができた。このような取り組みを継続し

て行っていただきたいとの要望があった。

現在、寺院としては所属門徒からの意見や要望があれば、可能な範囲で対応している状況であるが、やはり今後の門徒の動向や原発事故の收拾など、先の見えない厳しい状況の中で、住職、坊守からはどうしたらよいか、何をさせていただいたらよいか、正直「わからない」という苦痛の言葉が聞かれた。

組教化事業

組の教化事業については、既に被災地域で教区主催の「親鸞教室」を実施している。また、休止状態である「同朋教室(連続講座)」を北部・南部地域の会場で交互に開催する方向で、常磐自動車道の全線開通(来年5月予定)後に実施できるよう検討を進めることとなった。

また、今回の同朋総会についても、住職、坊守、寺族、門徒(推進員)が、現状を確認しつつ、今、そしてこれからの寺院と門徒の繋がり、寺院の存続など、次世代のことも踏まえて語り合える場の必要性が確認され、今後も継続的に開催していくこととなった。

宗派、仙台教務所としても、被災地の現状を『真宗』誌、『同朋新聞』、記録映像など様々な形で全国にお伝えするとともに、まだまだ展望を見出せない状況の中ではあるが、今後も、浜組の声をお聞きする中で、協力できることを模索していきたいと思う。

※① 年間積算線量が20ミリシーベルトを超えるおそれがあり、住民の被ばく線量を低減する観点から引き続き避難の継続を求める地域。

※② 5年間を経過してもなお、年間積算線量が20ミリシーベルトを下回らないおそれのある、現時点で年間積算線量が50ミリシーベルト超の地域。

寺院防災
マメ知識⑤

災害の一日前に
戻れるとしたら、
あなたは何をしますか

災害の姿は、なにも「被害想定」の数字からだけ浮かび上がるものではありません。

「津波何メートル」「震度いくつ」「全壊家屋何万棟」…こうした数字よりも「その災害でどんなことが起き、私たちはなにを経験するのか」を具体的に思い浮かべるほうが分かりやすいものです。災害の姿を知る方法のひとつは、被災者の体験に触れることです。様々な災害の体験談と教訓をコンパクトにまとめたページがあります。

「災害の一日前に戻れるとしたら、あなたは何をしますか」この問いかけに対し、地震や水害などの被害にあった人たちが体験を踏まえて答えているものです。被災した人でなければ分からないエピソードが数多く詰まっています。自分ならどんな災害にどう備えるのか、イメージしてみてください。

●内閣府「一日前プロジェクト」のページ

一日前プロジェクト

検索